

ベツレヘム

立石章三

旧約聖書にたくさんあるメシア預言の中で、最も有名なものの一つは、イエスがベツレヘムで生まれることを預言した**ミカ書5：1**です。ところでなぜこの地だったのでしょうか。ベツレヘムはその当時（紀元前8世紀）も、イエスが生まれた当時も、小さな貧しい村でした。ベツレヘムは「パンの家」という意味ですが（創世記35：19、ミカ5：1、マタイ2：1）、小麦を豊かに産する地であるゆえに、このように名付けられたのでしょうか。

この町には現在、世界中の観光客が集まって来ますが、昔から小さな貧しい村です。イエス誕生当時には付の人口はせいぜい数百人、ヘロデ大王によって殺された2歳以下の赤ちゃんはせいぜい20人程度だったでしょう（拙著『エデンの園のラピスラズリ』74頁）。

ベツレヘムは古くはラケルの埋葬地（創世記35：19）、ルツがナオミと典に移り住んでダビデの祖先となった地（ルツ記19、2:4、4:11）で、ダビデゆかりの地です。現代ではベツレヘムに「降誕教会」が建っています。内部には世界中から集められたイエスとマリア像のタペストリーが展示してあり、日本からは高さ5mもある、イエスを抱く着物姿のマリア像が贈られ、飾ってあります。

さて旧約聖書にはベテ・△△、ベト・△△、ペツ・△△という地名がたくさん出てきます。これは日本語訳の違いに過ぎず、原文では全てベト・△△という表記で、[△△の家]という意味です。その一例を下記に見てみましょう。

ベト・シメシュ=太陽神シャマシュの家（サムエル上6:12）

ベト・バアル=バアル神の家（ヨシュア13:17）

ベト・ペオル=ペオル（モアブの神）の神殿（中有記3:29）

ベト・ホロン=ホロン神の家（ヨシュア記16:5）

ベト・アナトエアナトの神殿（ヨシュア記19:38）

ベト・ハラン=高きところの家（民数記32:36）

ベト・アペン=邪悪の家（サムエル上13:5）、

カナンの地は、宗教のデパートのようにたくさんの偶像の神殿がおりましたが、このような場所でメシアが生まれるわけにはいきません。ベテル=神の家（創世記28:19）なら構わないでしょうか。そのほか庶民の生活に密着した地名では、ベト・ザタ=オリーブの家（ヨハネ5:2）、ベト・サイダ=漁の家（マルコ6:45）、ベト・ガムル=らくだの家（エレミヤ48:23）、ベト・メオンユ逃れの家（エレミヤ48:23）があります。これらの中でも最も身近で親近感を持つことができるのは、ベツレヘム=パンの家だったのでしょうか。メシアは偶像神の地でもなく、貴族の住む高級住宅街でもなく、庶民の台所から生まれたのです。

そしてもう一つ、偶像に因む地名では、滅びて無くなってしまふことが頻りにありました。また名前が変わってしまうケースもあります、日本でも権力者の都合によって、江戸が東京に変わりました。庶民にとって最も身近でありながら、親しみが持て、いつまでも残る素朴な地名のベツレヘム、ここでメシアは生まれました。

また讃美歌の話です。以前修養会の報告を読んでいたら、次のような話に出会いました。信徒修養会の夜に讃美の夕べというプログラムがあり、信徒がある讃美歌にまつわる証詞をしてその後に会衆一同でその曲を歌う。続いて別の信徒が違う讃美歌にまつわる証詞をしてみんなで一緒に歌い、続いてまた別の信徒が…というプログラムがとても印象深かったというのです。私自身は参加していませんし、改革派の修養会だったのか、他教派であったのかも今となっては判然としません。でも信仰生活の中にはいくつか思い出深い讃美歌があって、その曲を歌うと決まってその時のことを思い出すということは誰にでもあるのではないのでしょうか。讃美歌は信仰生活にとって大きな恵みであり、慰めであることは間違いないことです。

そういうわけで、私にとって思い出深い讃美歌を1曲紹介したいと思います。誰か私に続いてこの企画に乗ってくださる方がいらしたら歓迎します。思い出の讃美歌を語ってくださいますか？

今回私が取り上げたい讃美歌は391番「ナルドの壺ならねど」です。歌詞は、福音書に描かれた一人の女性が高価なナルドの香油を惜しまずふりかけたように、私もイエスに愛を捧げようという歌です。

この歌が私の印象に強く残っているのは、急死したいとこのMちゃんのお別れ礼拝で歌われたからです。今から40年近く前の話で、私は20歳前であったと思います。横浜に住んでいたMちゃんは当時成美学園高校（現青山学院横浜英和高校）というキリスト教主義学校に通う高校生でしたが、突然の脳出血であつという間に亡くなりました。親族によるお葬式とは別に学校でお別れの礼拝があると聞きわざわざ出かけました。

チャペルにはたぶん全校生徒がいたと思います。数百人の女子高生がっくり出す厳粛な雰囲気には私は圧倒されました。讃美歌が歌われ、聖書が読まれ、説教にかわる短いお話しがあったと思います。その後彼女の所属していたクラスの合唱が披露されました。つい最近行われた合唱コンクールで彼女は指揮者であつたらしく、クラスは思い出の曲を歌いました。しかし途中から涙、涙で歌を続けることも困難な有様でした。チャペルを泣きながら退出していく生徒たちの姿は今も私の脳裏に鮮明に残っています。それがミッションスクールとの出会いでした。学校のチャペル、学校の礼拝というものに初めて出会いました。まさか後にキリスト教主義学校の教師になるとは思っていませんでしたが、あの時の体験が私に決定的な影響を与えたのかもしれない。

遺族代表で挨拶をされたMちゃんのお母さんが讃美歌の歌詞をひいて、「Mは奉仕することがとても好きな子でした」と話されたことが今も思い出されます。

考えてみました

N. T

去る11/29 連合執事会での講演発題「同時代的」(コンテンポラリー)、若者文化を認識してどのように若者に伝道するかということです。例えば、教会で使っている言葉(献げる、証し、日用の糧、求道者等)は若者に違和感を感じさせるので若者に分かりやすい言葉にして使う。若者文化を理解し受け入れる。「今時の若者の考え方はどうもね」と思うならアピールすることは難しい。(私が30年前に教会に来た時はどうだったのかは記憶にありませんが)そういう訳で若い人達に対する配慮もなく接してきた事を指摘されたのだと思いました。

私の職場にも可愛い若者はもちろんいますが当たらず障らずという関係です。「手を貸して」と言われれば「ハイ」と動きますしだからといって彼女たちの輪の中に積極的に入る事ありません。同年代の人たちといるとホッとします。考え方や生きてきた時代に共通点があるからでしょう。又、若者が中高生ならばまた違うかもしれません(この年代と会話することがないので)

自分が若かった頃を思い出して、ずっと教会に来れているのは教会用語の難しさよりも多くの教会員との温かい交流(もちろん礼拝が一番ですが)だったと思います。すべての年代の人と上手に付き合うことは難しいことですし理解しあえるとも言えませんが、文化が変わっても人は変わらないと考えて一人一人の生き方を否定せず優しくしたいとおもいます。

主は言われた 彼らはわたしの民、偽りのない子らである、と。

そして主は彼らの救い主となられた。

彼らの苦難を常に御自分の苦難とし

御前に仕える御使いによって彼らを救い

愛と憐れみをもって彼らを贖い

昔から常に彼らを負い、彼らを担ってくださった。

イザヤ63:8、9節